



TITLE:

<批評・紹介> 清水盛光著 「支那家族の構造」

AUTHOR(S):

小畑, 龍雄

CITATION:

小畑, 龍雄. <批評・紹介> 清水盛光著 「支那家族の構造」. 東洋史研究
1942, 7(6): 425-427

ISSUE DATE:

1942-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/138850>

RIGHT:

支那家族の構造

清水盛光 著

昭和十七年六月二十五日
A5 判本文五八二頁

岩波書店發行
定價四圓貳拾錢

著者清水氏は昭和十四年に『支那社會の研究』を著して支那社會構造の樞要なる部面の究明に努められたが、その第四篇に於て扱はれた支那家族の構造の問題を更に修正發展させた成果が本書である。しかし直接には「滿鐵調月査報」に連載された論文に修正を加へて本書ができたのである。これを舊著の支那家族に關する部分に比較してみると、抽象的平面的なものが具體的立體的なるものになつてゐると思はれるが、著者の立場は一貫して社會學的立場である。しかし社會學的と云つても種々に分れることは社會學の概説書が實に多様なことから察せられるのだが、著者によれば、家族の社會學的研究は、家庭生活に關する法律や制度や習俗や歴史の單なる叙述に止まるべきではなく、進んでそれを家族的人間の表現と解し、かかる表現から出發して血縁社會の全體像を統一的に眺め、同時に家族的人間をできるだけ生けるがまゝの姿に復元することをもつて、本來の任務とすべきだといはれる。かかる立場から支那家族が取扱はれるのだが、「家族」といふ概念は、日本支那及び歐洲の各地各時代にわたる種々の言葉が此にあてられると、實に多義的となる。著者によれば、舊著でもさうだつたが、「家族」を「集團化された親族の範圍」即ち「親族集團」の意味で用ひられる。従つて常識的な家族を超える範圍をもつ宗族もこの「家族」に含まれる。これに對して社會學者からは恐らく何か批判が加へられるだらうが、この家族概念の下に、普通に家族と云はれる同居同財の集團を經濟的家族とし、宗族を宗教的家族として區別されてゐて、本書中には家族概念の紛淆は無いやうだから、かかる家族概念は充分認めらるべきだらうと思ふ。

かくて本書の構成は、前篇「親族と家族」後篇「家族の構造」に分れる。前篇の第一章「親族關係の本質と形態」には親族關係と血縁紐帶が説かれ、又稱謂組織の發展が述べられ、第二章「家族集團の容積と發展」では、血縁結合の限定にもとづいて生じた支那家族の種類として、家族（經濟的家族）と宗族（宗教的家族）とが取上げられ、家族の縮小と宗族の殘存發展とが明かにされる。後篇の第一章には「家族に於ける親利と全體意識」第二章には「家族における從屬と統制」機構が説かれる。前篇には血盟、稱謂、服制など、後篇には義田、祭田、族譜、緣坐、復讐、械闘、父債子還の慣習、族内裁判、家族道德、族長權など、重要な事項が含まれてゐて、個々の問題としては見逃されやすい意味を全體系の中に於て與へられてゐる。要するに前篇は發展史的考察であり、後篇は社會學的分析である。

る思ふに最近我國に於ける支那家族研究の進歩は目ざましく、個々の問題について多くの秀れた論文を數るへことができるが、本書の體系化された内容もそれらの研究の上に組立てられたものである。本書は特に前篇に於て加藤常賢博士の名著『支那古代家族制度研究』を参照されたことが窺はれる。といつても加藤博士の説をそのまま受入れたのではなく、批判的にそれが採られてゐる。例へば嫡字の意味（五五頁）や小宗團體發生の理由（一九二頁）については別の解釋がなされてゐる。けれども兩書は別のもので、對象とされる時代が異なるのみならず、本書には加藤博士の著書に見られる如き嚴密周到なる考證はなく、むしろ社會學的分析解釋に長所を認むべきである。

本書は支那家族の全體像を眺めんとするもので、その意味に

於て充分の價值をもつてゐると思ふが、全體の體系化に努められてゐる反面、個々の問題についてはなほ研究の餘地は殘されてゐる。また宗族集團の容積については、家族（經濟的家族）の縮小説が唱へられてゐるが、この點について我々は牧野巽氏の最近の研究をも參照しなければならない。例の『漢書』惠帝紀の惠帝即位の詔「今吏六百石以上父母妻子與同居……」の讀み方はかつて問題になつたところだが、著者は狩野博士に從つて、「同居」を動詞に讀まれ、「父母妻子與同居」は六百石以上の吏に對する限定句と考へられた。「同居」を名詞と解するのは、少し意味が違つてくるが、その結果漢代の家族については、守屋氏の所謂典型的家族に當る三世同居が廣く存在してゐたといふ結論が導かれることに於ては大差はない。

本書は資料博搜、多くの族譜に及んでゐる。引用文は總て假名交りに讀み下されてゐるので便利だが、著者の讀み方の正否は判斷し難い。資料の扱ひ方についても疑問なきにはあらず、諸文獻の重要性や信憑性は更に慎重にさるべきであらう。『周禮』によつて周代の事實を實證するのは危険であらうし、また仁井田博士の『支那身分法史』を評して、唐代に唐律が行はれた如く宋代に宋刑統が行はれたのではないと云はれた宮崎助教授の老婆心は、本書にも適用されるであらう（本誌七ノ二・三）。最後に本書は仁井田博士著『支那身分法史』と研究對象の重なる部分が多い。もとより立場は社會學的と法制史的と異なるのだから、同時に談することはできないけれども、ともに清朝までの舊支那家族の研究を含み、且つ若干の解釋の相違も見られるから（例へば親族と親屬）、兩書を併せ讀むことによ

つて、最近の支那家族研究の成果及び動向がより明かになるであらう。（小畑龍雄）